

がCTに先行して病変の再発や治療効果を予測できたものが含まれた。したがって両者の診断情報は異なり、腹部診断にはSPECTの併用が必須と考えられた。

9. 若年性小葉間胆管形成不全症の肝胆道シンチグラフィ——他の慢性肝内胆汁うっ滞症との鑑別を主体に——

油野 民雄 横山 邦彦 高山 輝彦
利波 紀久 久田 欣一 (金沢大・核)
一柳 健次 滝 鈴佳
(福井県立中央病院・放)

慢性肝内うっ滞は、慢性に間歇的に生じる肝内胆汁うっ滞であるが、原発性胆汁性肝硬変、原発性硬化性胆管炎、若年性小葉間胆管形成不全症、薬剤性肝内うっ滞が含まれる。今回、薬剤性肝内うっ滞を除くこれら三疾患の肝胆道シンチグラム所見に関し検討した。小葉間胆管形成不全症では、肝の末梢部に特徴的なRI貯留像を呈し、胆汁性肝硬変、硬化性胆管炎とは異なった所見を示した。また胆汁性肝硬変、硬化性胆管炎は、互いに異なった所見を示す。以上、肝胆道シンチグラフィは、慢性肝内胆汁うっ滞におけるそれぞれの疾患の病態の相違を、適切に捉えることができる点できわめて有効と思われた。

10. 肝細胞癌[HCC]の転移巣の検索におけるTc-PMTスキャンの有用性

多田 明 平 栄 立野 育郎
(国立金沢病院・放)
若林 時夫 鈴木 邦彦 (同・内)
高橋 志郎 (能登総合病院・放)
高仲 強 (金沢大・放)

転移巣のある肝細胞癌11例に対し、肝胆道スキャンであるTc-PMTを静注4時間後に全身像を撮像し、病巣の検出率、集積の程度を検討した。転移巣の内訳は、骨11例、肺2例、軟部組織2例であった。Tc-PMTスキャンでは10例中7例で転移巣への異常集積を認めた。骨スキャンは骨転移の検出に優れているが、1例では集積を示さなかった。Ga-67は7例に行われたが、うち5例に異常集積を示した。集積の程度はTc-PMTが一番明瞭な集積を示し、肺転移に比べて骨転移巣に強い集積を示した。Tc-PMT全身スキャンは集積した場合の組織特異性

が高く、転移を疑うHCC患者の検査法として骨スキャンと同等以上の有用性を持っていると考えた。

11. ピンホールコリメータによるSPECTの試み

川合 宏彰 金子 昌生 (浜松医大・放)
坂本 真次 (同・放部)
加藤 利康 (島津製作所)

口径を変えることのできるピンホールコリメータを使用して、回転軸に垂直な中心の、1スライスのみではあるが歪みの少ないSPECT像を得ることのできるデータ並び換えソフトウェアを考案し、基礎的検討を行った。結果は歪みの少ない実用上FWHM 9mm以下の高分解能SPECT画像が得られた。ソフトウェアの作動時間は数秒であった。条件としては分解能がよく(回転半径10cm, FWHM 8.5mm)、感度低下がわずかである(LEHRに比較し22%低下)口径4mmのピンホールコリメータが当院のシステムでは適した。本方法は小臓器のSPECTに有用であると思われた。現在多数のスライスをとれるコリメータを考案中である。

12. アルツハイマー型痴呆モデルラットにおけるコリンアセチルトランスフェラーゼおよびコリンエステラーゼ活性の放射化学的測定

松田 博史 寺田 一志 絹谷 啓子
久田 欣一 (金沢大・核)
森 厚文 柴 和弘
(同・アイソトープ総合セ)
辻 志郎 (映寿会病院)

一側前脳基底部破壊によりアルツハイマー型痴呆モデルラットを作製し、頭頂葉皮質においてコリン作動系酵素を放射化学的手法を用いて測定した。1)イボテン酸注入部位ではNissl染色において神経細胞の脱落とグリア細胞の増殖、AchE染色においてMaganocellular Basal Nucleusの脱落が認められた。2)イボテン酸注入側では頭頂葉皮質のAchE染色能の低下が認められた。3)注入側頭頂葉皮質は対側皮質に比べて、コリンアセチルトランスフェラーゼは平均46%、アセチルコリンエステラーゼは平均40%減少していた。